2023.3.15
Vol. 68

北海道サケネットワーク Newsletter

発　行 阿部周一
事務局 高橋壽一 札幌サケ協議会
〒006-0839
札幌市手稲区曙 9 条 1 丁目 10-25
Tel/Fax：011-681-4268
E-Mail：jaytaka@carrot.ocn.ne.jp
URL：http://salmon-network.org/
編　集 寺島一男
E-Mail：tera2112@potato.ne.jp

都内では桜の開花が発表されました。道内でも雪解けが急速に進み、春の足音が日増しに高まっています。皆さんいかがお過ごしでしょうか。

新型コロナが 5 月から 5 類に引き下げられることになり、マスクの着用も今月 13 日から個人判断になりましたが、まだまだ油断はなりません。それでも懸案であった北海道サケ会議が、標津サーモン科学館と標津町のご協力により、今夏当地で開催できる運びになりました。感謝申しあげます。

INFORMATION

23 年度のサケ会議は標津で

サケネットワークではこれまで札幌のほか旭川や帯広でサケ会議を開催し、地方でのサケをめぐる特有の課題や資源保護など市民活動の現況について研修を深め有意義な成果を上げてまいりました。23 年度は舞台を標津に移し、さらにネットワークの活動を広げることと致しました。22 年度のテーマ「気候変動下のサケ～適応的な生産と利用に向けて～」について、札幌では総合的な話題提供となりましたが、標津ではサケ生産の現場における様々な取組みをご紹介頂き、このテーマの内容をより深めるものとなります。

なお、23 年度総会は開催の都合上、オンラインによる書面協議とさせて頂きます。

標津ではサーモン科学館のご厚意により同館を会場に以下の日程、内容でサケ会議を開催する予定です。正式のご案内はおって通知致しますが、会員の皆様にはふるってご参加頂きますようあらかじめお知らせ申し上げます。

サケ会議の概要

【1】会議開催日：2023 年 6 月 10 日(土)～11 日(日)
【2】主宰：北海道サケネットワーク
主催：標津サーモン科学館
後援：標津町
【3】テーマ：標津町のサケの取り組み(仮)
【4】日程(予定)

6 月 10 日(土)
●午後…講演
(演題はいずれも仮題)
・趣旨説明(サケネットワーク 河村顧問)
・標津サーモン科学館の取り組み(市村館長)
・日本遺産「鮭の聖地」の物語(ポー川史跡自然公園 小野園長)
・サケの活〆の効率化(標津町漁業者 小野瀬氏)
・標津町のサケの取り組み(標津町役場 佐々木水産課長)
・標津漁協の取り組み(標津漁協 織田専務)
・まとめ(サケネットワーク 阿部代表)
●夕刻…交流会

6 月 11 日(日)
●午前…エクスカーション
(ポー川カヌー下りなど予定)
※詳細はネットワーク事務局までお問い合わせください。

訃報

元千歳サケのふるさと館長で本北海道サケネットワーク顧問をされていた木村義一さんが、去る 3 月 2 日逝去されました。

北海道サーモン協会の設立をはじめサケに関する教育・普及等に長年にわたってご尽力されました。心からご冥福をお祈りいたします。(行年 91 歳)

Topics

石狩川中上流域のサケ
—旭川で記念講演会—

発足から 10 年目を迎えた「あさひかわサケの会」の会員会議(総会)が、2 月 19 日市内の会場で開かれました。

会議に先立ち一般公開の記念講演会がもたれ、明治コンサルタント(株)の有賀誠さんが「石狩川中上流域のサケの遡上—支川・支流への遡上に着目して－」と題して講演を行いました。

有賀さんは河川や砂防の調査、計画、設計業務に携わるかたわら、1998 年から深川市にある旧花園頭首工の魚道調査を開始し、02～04 年にテレメトリーシステムによるサケの遡上行動調査（60 ㎞ 12 日間）、07～09 年には頭首工下流部における産卵床調査などを実施して、空白だった石狩川中上流部におけるサケ遡上の実態把握に大きく貢献されました。

講演では、旭川からの稚魚放流由来の個体が頭首工下流域で産卵していた可能性があること、また石狩川中流でも元々のサケが、本川や支川で自然産卵による再生産を行い、命脈を保っていた可能性があること等が話されました。

EVENT NOW

半世紀をあゆむ！
―盛会だった記念行事―

創立 50 周年を記念する大雪と石狩の自然を守る会の「第 23 回大雪山フォーラム」(大雪クリスタルホール)と祝賀会(大雪地ビール館)が、2 月 26 日旭川市内で行われました。

守る会は 1972 年に大雪縦貫道路問題を契機に設立され、以後、自然保護運動は生きとし生けるものの生存基盤を守る運動であるとして、大雪山や石狩川の環境保全に取り組んでいます。

フォーラムでは、同会が制定した石狩川憲章が創作曲となり、地元の合唱団によって特別披露されたほか、同会の「半世紀をあゆむ－大雪山と石狩川と－」がスライドで報告され、続いて小泉武栄東京学芸大学名誉教授による記念講演「山の自然を読み解く視点―地生態学的なものの見方について－」が行われました。

フォーラムと祝賀会には、旭川市長をはじめ関係者や市民 193 名(延べ)が参加し、50 周年の節目を祝いました。

ヤマベたちの守り神
―その 2－

河村　博

乗り越えるべき相手　ヒグマ（2）

昭和 50 年代のえりも支場で初めてヒグマを強く意識したのは、赴任翌年の春、まだ残雪がみられる支場構内に点々と残るクマの足跡でした。聞くところによると、支場設置地域は歌別川と上歌別川が合流するはさまれた場所であり、ここは「クマの通り道」だったのです。ただちに追跡隊が足跡を追いましたが、途切れた残雪のため見失ってしまいました。

当時、支場で夜間も仕事をすることがあり、そのような時、必ず支場構内を一巡してから帰るのが常でした。構内には電灯が据えられていますが、建物や木立の陰の部分は見通しが効きません。ヒグマ足跡の一件以来、さすがにしばらくの間この習慣を控えることにしました。今思うと、この時必要以上にクマを恐れ過ぎていたようです。しかしこのクマはこれ以後、再び姿を現すことはありませんでした。

実はこのクマは、注意深く私たちを避けていたのかもしれません。クマに関する知識や経験そして観察が、現在とくらべて格段に貧弱でクマの残すサイン（信号）を見落としていたのかもしれません。公宅のあったえりも町大和地区の高台墓地では、お盆のころお墓参りのご馳走を目当てにクマの出没が聞かれていた時代です。「通り道」の支場構内をクマが利用しない訳がありません。いずれにしてもクマと支場関係者の平和が保たれていたのです。

さて今も変わりませんが、日高山麓を流れる川の調査や釣行では、ヒグマに振り向ける意識の強さは半端ではありませんでした。心配した渡辺克彦支場長があるものを探し出してくれました。かつての豆腐屋が使うラッパです。「プア―ッ。」の響きは、とてもとても室内では耐えられない大音響なのです。力強い味方を得たと一安心しました。

当時渓流釣りの世界では、新技法のルアーとフライフィシング勃興の時代を迎えていました。たちまちルアーフィシングの虜になったことから、趣味と実益（魚類の分布調査）を兼ねて、えりも岬東側の猿留（さるる）川を訪れたときのことです。

この川は、大型ヤマメの生息と大型ヒグマの出没とでつとに有名な川でした。支流の「登の沢」を釣り上がったときのことです。恐怖に耐えながらいくら遡行しても、魚の反応（アタリ）がないのです。その訳は最後になってようやく判明しました。何と、先行する釣り師がいたのです。彼は秘かに足跡を残さず、しかも私の吹くあのラッパの音で距離を保ちながら釣り切り、最後にミスを犯して足跡をひとつ残したのでした。この一件は、釣り師とヒグマの関係をあらためて考えさせられた経験のひとつになりました。

（サケネットワーク顧問・元北海道立水産孵化場長）

倒流木のヒグマの爪跡

林道に残された前足跡